

地方公立学校における英語イマージョン教育実践の可能性

教科横断型「ちょっとだけイマージョン風」で、生徒の英語使用量と使用場を増やしてみたら

静岡県立浜松商業高等学校 教諭 久保田 愛

I はじめに

今後の社会で必要な外国語運用力やコミュニケーション能力、問題解決能力を身につけさせようと、国際バカロレアや英語イマージョン教育を取り入れる学校が増加している。これらの学び方では、言語は何かを学ぶためのツールであって、学びの対象そのものではないため、英語使用量が増加するだけでなく、より実践的な場面で英語を身に付けていくことができる。

理想的であると感じる一方で、こういった環境にある子どもたちと、週3、4時間程度の通常授業でしか英語に触れない環境にある子どもたちとの間で格差が広がるのが心配される。また、新学習指導要領では、「言語使用の目的、場面、状況」が重視されているが、英語授業の範囲でこれらを工夫することには限界があるとも感じる。地方公立学校で学ぶ子どもたちが、特殊な環境下の子どもたちと比べて不利なく、必要な力を身に付けられるようにする方策を考える必要がある。

II 主題設定の理由

本校1年生に対して、入学後に実施した英語に関する調査では、「英語が嫌い」「英語が苦手」と答える生徒の割合が5年前と比較し約3割増加している。一方、教える側の感覚では、生徒が英語を使おうとする意欲は、この結果に反し向上しているとも感じる。インタビューや発表などの活動に対する抵抗感は、小・中学校でそういった経験が増えているおかげで減少し、挨拶や日常会話等のやり取りにも積極的である。「テスト」や「正確さ」に対する苦手意識は強くなっているが、コミュニケーションを図るという、教科目的の最も根本的な部分に対しては、前向きな気持ちを持っていると考えられる。また、本校には、地球規模の視野と、草の根の地域の視点で、様々な問題を捉えることができる、「グローバルな人材」を育てることが求められている。このような状況を踏まえ、生徒が英語を使用する場を学校生活全体の中で増やしたい、と考

えたことが主題設定の理由である。教科横断型の授業を実践し、「ちょっとだけイマージョン風」にすることで、英語コミュニケーション能力の向上を目指した。

III 研究方法の概要

英語の授業で関わる生徒たちが、該当年度に学ぶ全科目のシラバスを確認し、使用教材（教科書等）を購入した。それらを確認しながら、各科目の授業担当者に「今、何を学んでいるか」「これからどんなことを学ぶのか」等を教えてもらい、学んだばかり、または学んでいる最中の事柄について英語で復習する帯活動を英語の授業で実践した。また、体育や家庭科など、実技をとともう授業では、担当教員の協力を得て、ALTとともにティームティーチングを実践し、生徒らが「実際の場面で英語を使う」ことができるよう取り組んだ。

IV 研究・授業実践

(1) 帯活動

① 科目名

まず、「他教科」について英語コミュニケーションの授業で触れはじめたことで、科目の名前を生徒らが英語で理解できるようになった。例えば、geographyという単語を、初めは理解できなくとも、“You studied geography in the 2nd period with Mr. ○○.” というように話すことで、「あ～地理だ！」というように、文脈や状況から英単語の意味を理解していった。また、それを自然な会話の流れの中で繰り返したことにより、bookkeeping（簿記）、cost accounting（原価計算）、contemporary Japanese language（現代の国語）、public（公共）など、履修の教科名をほとんどの生徒が即座に理解できるようになった。

② Vocabulary（語彙）（地理総合など）

英語使用機会が限られた学習者にとって、語彙・表現の定着は大変なことである。文脈の中で理解する、

例文を活用する、声に出して練習するなどの工夫をしているが、なかなか定着につながっていない。今回の取り組みで、他教科の学習内容を取り扱うことは、理解を助けるだけでなく、対象語彙を学ぶ意義を見出しやすいという点でも、非常に有効であると感じた。

一例として、地理総合で北米について学習していた時期に行った帯活動でのやり取りを紹介する。

以下 T = 教師、S = 生徒

T: "What are you learning about?"
 S: "America"
 T: "Great. What about America?"
 S: "有名なものとか、天気とか"
 T: "yumei?"
 S: "Famous in America."
 T: "Oh, famous things in the US."
 S: "Yes, yes."
 T: "What is famous?"
 S: "小麦、大豆"
 T: "? (顔の表情で)"
 S: "Ah... bean, and small powder."
 T: "Soybeans?"
 S: "Yes."
 T: "And?"
 S: "Powder. White powder."
 S2: "Wheat." (教室の別の方向から)
 T: "Wheat! I see. So the powder is called, flour."
 S: "Ahh"
 T: "Do you remember? We've learned these words. Which lesson was it?"
 S: "kasosui"
 S3: "Virtual water." (隣の生徒が)
 T: "Right. In the lesson about virtual water. Now, let's practice these words."

以上の例にみられるようなやり取りを通じて、公共やビジネス基礎、保健等の科目においても、その教科の学習内容と英語授業での既習事項を組み合わせることで、効果的に語彙の定着を図ることができた。教師の立場からしても、語彙の定着のために文脈を用意する必要がなくなり、生徒にとって自然かつ意味のある文脈を提供しやすくなると感じた。

(2) 家庭科

① ロールケーキ

手順を説明するというタスクは、現在発行されている多くの検定教科書で取り上げられている。レシピの

紹介も英語教科書ではよく扱われている話題であり、実際、対象となった3年生は前年度に「パンケーキ」や「天ぷら」の作り方を英語で説明する活動を経験している。通常の英語の授業では、ロールプレイなどの形でやり取りを促す工夫をしてきたが、実際の調理実習と融合してみると、ロールプレイでは得られなかった学びと発見が数々あった。

まず、実際の「もの」や「動作」を伴って語彙を使用することが可能になった。例えば、生徒が「(卵を)割る」という英語がなかなか出てこず、ジェスチャーで卵を割る仕草をしていると、ALTが“Oh, you mean, break.”と返してくれる。生徒は、いかにも、あ～それぞれ!という反応を見せながら、“Yes, break. Break eggs!”とこの表現を使用しながら卵を割った。言語の理解に知覚運動表象が関与することは研究でも報告されており、このような「経験を伴った言語学習」が効果的であることは、科学的にも裏付けられている。

また、事後の生徒の感想から、生徒の学びが主体的なものになっていることが見とれた。例えば、「混ぜるにもいろいろあるけれど、その違いがちょっと分かった」「さっくり混ぜる、と言いたかったけれど、さっくりを何と言っていいかわからなかった。結構重要な工程なのに、(英語の)教科書ではそういうのは出てこない」などという感想が見られ、自分なりに言語を吸収しようとする主体的な姿勢を感じることができた。

② お弁当 (小松菜と油揚げのおひたし、卵焼きなど)

一度目のロールケーキ作りの際に、生徒らが感じた「言いたいけれど言えない」を助けるアイテムとして、便利ワードリストを作成し、ラミネートしたものを各班に用意した。直前の英語の授業にて、英語授業担当者に依頼し、それらの単語の発音練習も一通り実施したうえで、調理実習に臨んだ。

Cooking is Science: Let's make Japanese Style Bento lunch!

| | | | |
|------------|---------------------|-----------|-------------------------|
| こんぶ (海藻) | seaweed- | アルギン酸- | alginate- |
| かつお- | bonito- | グルタミン酸- | glutamic acid- |
| かつお節- | dried bonito- | コハレ酸- | succinic acid- |
| だし (洋風の場合) | soup stock / broth- | シュウ酸- | malic acid- |
| しょう油- | soy sauce- | .. | .. |
| みりん- | mirin / sweet sake- | 卵黄- | egg yolk- |
| サラダ油- | oil- | 卵黄卵白- | egg yolk and white- |
| 刺のり身- | a slice of fish- | 卵黄卵白を混ぜる- | mix egg yolk and white- |
| 小松菜- | masuhiro spinach- | 卵焼き- | cook egg- |

【資料1 便利ワードリストの一部】

教師の発音に続いて、リスト化された英単語を読むという学習方法は、英語授業でよく行われている。しかし、いくらそのような練習を繰り返しても、思うように語彙が定着せず、教師も生徒もがっかりするということは珍しくない。ワードリストをただ読むだけで

なく、それらを使用する場面があることが、定着に有効であることを体感した。読むだけでは、定着の難しかった「spatula (フライ返し)」という単語も、実際にそれを手に持ち、ひっくり返す動作をしながら、「spatula」と言う経験があれば、記憶に残りやすい。



【資料2 調理実習の様子】 【資料3 完成したお弁当】

③ お茶の入れ方、出し方・和菓子

3度目のちょっとだけイメージン家庭科授業は、お茶の入れ方や出し方、和菓子についての実習で実施した。生徒らが、家庭科の授業で事前に学んだ「お茶の特徴」や商業科目の課題研究で学んだ「来客へのマナー」等の内容を、英語教師側も学んだうえで授業に臨んだ。そうすることで、実習中のやり取りを英語で行うだけでなく、実習の目的に関わる質問を英語ですることが可能になった。「お湯をいったん、湯呑に入れる理由」や「使い終わった懐紙と黒文字をどうするか」等、質問された生徒は、戸惑いながらも、身振り手振りを使い、仲間と協力して答える様子が見られた。

(3) 体育 (卓球)

事前の英語の授業で、高校生体操を英語で説明する活動を行った後、体育の授業 (卓球 (女子)) でちょっとだけイメージン授業を実践させていただいた。

| 高校生体操 | | | 動作の説明 | 説明 |
|-------|--------------------|-----|-------|---|
| 1 | 両足とび | 8 | | 両足を揃えて、その場で軽くとび |
| 2 | 足の側関節とびと、腕前腕伸下 | 1.6 | | 足の側関節とびに、合わせて腕を前に上げ、肘を曲げ、腕伸ばしおろす。 |
| 3 | 腕の外関節と、拳握半屈及び、腕出屈 | 1.6 | | 腕の外関節及び、内関節に屈め、半屈伸各1回、更に外関節にて足の屈伸出し内屈伸、もとに戻る。 |
| 4 | 腕前腕伸伸と、腕前腕屈伸、腕前腕屈伸 | 1.6 | | 腕を前腕伸して、足を屈伸し、足を前腕屈伸して、腕を前腕屈伸する。 |

【資料4 高校生体操の説明】

知覚運動表象が言語学習を効果的にする様子は、体育の授業内でも観察することができた。体育では、家庭科での調理実習以上に、相手との協力なしにできない活動が多いため、さらに言語使用が促されていた。

また、生徒の感想から、ちょっとだけイメージンの取組みが、言語そのものへの興味を高めることにもつながっているのが見えてきた。英語の授業では触れることのない「leap frog (馬飛び)」「push-ups (腕立て伏せ)」などの表現を知るだけでなく、それらが「飛

び越え (leap) 蛙 (frog)」「押して (push) 上げる (up)」等の意味であることを生徒らは自ら発見し、英語の表現に納得したり、言葉の面白さを感じたりしていた。

言語への興味を高める以外に、感想の中でもう一つ興味深かった点は「言いたいこと、言うべきことを言えなかった」という苦い経験が、この取組みによって生徒にたくさん提供されていることが分かった点である。具体的には、次のような場面があった。

ALTを含めた3人グループでの活動の際、審判になったALTが、失点側に誤って加点してしまう場面が何度もあった。その場面で、生徒たちは「違う」と主張することができず、毎回そのまま流してしまっていた。授業後、生徒らに声をかけると、「間違えていると思ったけれど、自分の勘違いかなと思うことにしてしまった」「My point って言えばいいのはわかっていたけれど、何となく言わなかった」とのことであった。

上記の場面で生徒は、自分の言いたいことを言うための「言語力」を持っていたにも関わらず、それをするための「コミュニケーション力」が不足し、発言できなかった。この気づきにより、「言い返してみる」等、日本の生徒が苦手とするコミュニケーションの場面を、英語授業内に増やす授業改善をすることができた。

他教科での取組みが、英語授業の改善につながった場面が他にもあった。体育の授業後、英語授業で体の部位を表す語句を扱った際、「手のひらは英語で何というのか」という質問があった。高校生体操の際に「手のひらを上」と言ったことを思い出しての質問であった。これをきっかけに、一方的に学ぶべきものを与えるのではなく、生徒に学ぶものから選んでもらうほうが良いのではと考えるようになった。語句を載せない、身体の絵だけのワークシートを作成し、体の部位に関する語彙学習の方法を変更することにつながった。



【資料5 馬飛びの様子】



【資料6 卓球の試合】

(4) その他

帯活動、家庭科と体育の授業以外にも、防災訓練や部活動、委員会活動等にも、ちょっとだけイメージンを取り入れることができた。例えば、天災に関する英単語を学ぶ、ALTに避難訓練について連絡する、

部活動（華道部）で、花の名前や道具等についてALTに説明する等の機会を設けた。学校生活の様々な場面に英語を使用する機会を少しだけ増やすことができた。小さな積



【資料7 華道部の活動】

み重ねでも、回数を重ねるごとに生徒たちが英語で伝えることに慣れてくる様子を見取ることができた。「聞く」「話す」が繰り返し行われる「やりとり」の活動の場が、自然に増えた成果は大きいと感じる。

V 成果と課題

(1) 成果

生徒が「あ～あれね！」と反応する場面がともかく増えた。英語が得意な生徒も、そうでない生徒も、である。イマージョン風の授業場面では、「わからない」「無理」という拒絶感や無力感を感じられず、「言えるはず」「伝えたい」という気持ちが大いに感じられた。授業後の振り返りや、学期ごとの授業アンケートには「教科書よりも、（英語を）使う授業のほうがいい」という声が毎回たくさんあった。

観察と感想に基づいた研究としたため、英語力の向上という成果を、テストの点数等の数値で示すことが今回の研究ではできない。しかし、2022年度の実用英語検定（2級、準2級）合格者数は、過去10年で最も多くなった。今回の取組みとの関連は明言できないが、英語に関心を持ち、自主的に学ぶ生徒が増えたことが結果につながった部分もあるかもしれない。

また、全く別の成果として、ALTの活用という点においても「ちょっとだけイマージョン風」の取組みは有益であると言える。ティームティーチングがALTに丸投げだったり、本来の英語の授業のおまけになっていたりすることは少なくない。ALTがより多くの場面で生徒や学校生活に関わるようにすることで、相互の文化理解につながり、生徒理解に基づいた、より良い授業づくりが共にできるようになると感じる。

(2) 課題

① カリキュラムマネジメント

「イマージョン」を、授業準備の段階で「ちょっとだけ取り入れる」取組みは、個々の教師レベルで可能である。しかし、これを発展、定着させるには、他教科と横断的な学びができるよう、年間指導計画から変えていかなくてはならない。学校の教育目標に基づ

いて学校全体のカリキュラムを見直し、教科間の連携を強化していくとすると、負担は大きくなる。各学校で、取り入れやすく継続しやすい形で、少しだけやっていくことが良いのでは、と考えるが、個の教師に頼らないシステムを作っていくことは必要であろう。

② 教員の負担

上記と関連するが、英語教師が通常の持ち時間に加えて他教科の授業に参加しなくてはならない状態では、この取組みへの負担が大きくなってしまう。また、ティームティーチングを受け入れてくださった他教科の立場から考えても、打ち合わせや準備等の負担がある。目的の共有を十分にした上で、必要な時間確保ができる体制を学校全体で整えていく必要がある。

③ 評価（テスト）

今回の取組みを評価につなげようとする、と考えなくてはならないことが様々生じる。イマージョン風の取組みを続けるには、それが評価の対象そのものでなく、評価場面で力を発揮するための一助という位置づけが良いように思うが、教科内で検討が必要である。

④ ALT

「英語を使う」という必然性を生むにあたって、ALTの存在は大きい。しかし、ALT配置に関する近年の動向を踏まえると、ALTに頼った実践には無理が生じる可能性も高い。ALT不在の環境下で、どれだけ英語を使用する必然性を生み出せるかの工夫が必要になる。

VI おわりに

「目の前の生徒が英語を身に付けられる授業をしたい」と取組むも、なかなか思うようにいかず悩んできた。教科を横断したちょっとだけイマージョン風の取組みでは、少しの工夫の積み重ねで、生徒の英語使用量を増やしたり、語彙の定着を促したりすることができ、英語教育の本当の面白さを思い出すことができた。地方公立学校の生徒たちが、授業をきっかけに英語を身に付け、新しい時代に立ち向かっていけるよう、仲間教師と協力しながら、今後も努力していきたい。

参考文献：文部科学省 IB 教育推進コンソーシアム

(<https://ibconsortium.mext.go.jp/>) 2023年8月 Asher, J.(2009). Learning another language through actions (7th Ed).

栗津俊二・鈴木明夫・赤間啓之。(2015). 英語学習者における日本語文と英語文理解時の運動シミュレーション 日本認知科学会大会発表論文集, 583-587